



執筆協力 編集室システムU okamura.nobuyoshi@gmail.com

① 政治への期待 希薄化顕著

3首長選、都議選など低投票率

総選挙が目前に迫ってきた。新型コロナ対応へのまずさや政治と金の問題などで公連立政権に逆風が吹いている。一方でその風は野党連合の追い風になっているわけでもない。東京25区管内では今年、3月に羽村市長選、4月に日の出町長選、瑞穂町長選、6月にあきる野市議選、7月に都議選が行われた。そろって過去最低か最低水準の投票率となった。コロナ禍を考慮しても政治への期待の希薄化が顕著になっている。選挙の検証を今号から3回に分けて報告する。(東京25ジャーナル・岡村信良)

保守の一騎打ちとなつたのが羽村市長選	投票率は過去最低の40・43%。橋本氏に軍配が上がったが、背景は並木氏の6選を是と	しなかつた保守支持層が多かつただけという冷めたものだった。元町議の3氏が争つ
--------------------	---	--

た日の出町長選の投票率も53・83%で過去最低だった。町政をめぐる新旧住民の主導権争いやごみ処分場の誘致など町を二分する対立を抱え、激しい選挙戦を演じてきた光景はそこにはなかつた。結果は自民推薦候補が敗れ、初の女性町長誕生。かつての保守独裁的な町政の欠片すら感じられなかつた。

保守と改革保守的な争いとなつた瑞穂町長選の投票率は過去最低ではないが、43・11%で、選挙に行く人は行く、行かない人は行かない、自民推薦候補に入れる人は入れる、そうでない人は対立候補に入れるという変わらぬ投票結果になった。

いずれの選挙もかつてのように開発か自然保護かなど大きな対立軸がない、議会の人材不足が進み候補が小粒化しているなどの背景があるが、何より政治に期待がもてない、誰がやっても同じというあきらめが蔓延していることが大きな要因だ。

良い政治家を育てることを社会で考えていくことが待ったなしになっている。まずは前述した3首長選の当選者の働きをしっかりと見守っていくことから始めたい。良い政策を進めれば大きな拍手で追い風を送ることだ。

「2021選挙検証」は東京25ジャーナルの責任で掲載しています。質問、意見は090(8460)9688岡村までお寄せください。

創業の思いは「青梅発展」

60年余り前、青梅市の青年実業家たちが工業団地誘致に動いた。インフラ整備のため地元の有力者に出資を募り、青梅ガスを設立。社長に就任し、事業化を担ったのが中村信吾氏だ。その経緯を2代目の洋介社長が話す。

「当時、青梅は市制に移行して10年弱。先代たちは起業というより、青梅市を発展させたいという気持ちが強かつたのだと思う。た

青梅ガス 中村洋介氏



だ、想定していた東京ガスの配管は立川で途切れていた。そこでプラントによる独自の供給方式に切り替えたと聞いている」

都市ガスへの着目は、信吾氏が先見の明を物語る。供給を開始した1960年11月こそ顧客数は565件に過ぎなかつたが、翌年には1000を突破。石炭・灯油に加えガスが使われはじめ、業績は右肩上がりに伸びていく。

「さらに大手メーカーの工場進出といった追い風も味方したことは間違いない。大正12年生まれの父は千葉工業大学を卒業後、海軍技術将校として太平洋戦争にも出征し

た。復員後、縁あって中村家に入り婿。家業の染色に精を出しながらか青年団仲間の社長たちと交流していたようだ」

一方、洋介氏は東北大学を出てNECに就職。以来20年間、コンピュータ畑を歩んだ。事業承継を前提に青梅ガスに入社したのが2003年7月。翌年4月には社

【岡村繁雄】

東京25区管内の政治・行政、経済、社会、トピックス



編集室システムU okamura.nobuyoshi@gmail.com

記事は毎週土曜日に配信。タブロイド判をPDFで